



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第24主日 C年(2022年9月11日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：出エジプト記 32章7—11、13—14節

第二朗読：テモテへの手紙一 1章12—17節

福音朗読：ルカによる福音書 15章1—32節

いっしょ よろこ  
一緒に喜んでください

みことばをあじわう 主日の三つの朗読から

特に福音朗読に集中しましょう。『ルカによる福音書』15章には三つの物語、つまり「見失った羊」、「無くした銀貨」、「放蕩息子」の物語があります。

『ルカによる福音書』の作者は、ある一つのパターンに沿って福音書を編んだようです。それは、①イエスさまの行動、②イエスさまへの非難と攻撃、③イエスさまの応答です。そうしますと、今日の朗読箇所(冒頭)でファリサイ派と律法学者たちがイエスさまを非難する役目で登場しますから、この部分(1-3節)は作者による編集箇所かもしれません。また、作者は15章の三つの物語を「回心」というテーマに基づいて並べたと思います。しかし、羊も銀貨も、息子(弟)も回心したわけではありません。7節と10節にある「言っておくが」で始まる箇所はやはり作者による編集箇所と考えてよいでしょう。さらに「放蕩息子」の物語での息子(弟)の独り言(18-19節)は父親に会ったときに何を話すかを考えて生まれた言葉だとしたら、この息子(弟)が回心したとは言えないでしょう。ですから、「いなくなっていたが見つかった」と二度登場する箇所(24b節、32C節)もまた作者による編集箇所かもしれません。これらの部分(7節、10節、24b節、32C節)を取り除くと、よりイエスさまが語ったオリジナルに近くなるのではないかと思います。

しかし、わたしたちは聖書のことばを「神のみことば」として受けとめますから、仮に編集の手が加えられていたとしても、聖書のテキストをそのまま受けとめることにしましょう。少し言葉に注目してみてください。

## 失われた羊のたとえ：

### 4 節：百匹の羊

この節は修辭的な疑問文となります。「あなたがたのうち一体どんな人が、……こうしないだろうか?」、当然、聞き手や読み手は「そうだ。当然そうする!」と答えるような文章の構造です。強い共感や強い同意を求める語り出しです。「持っている人がいて」の「持つ」はギリシア語でエコーですが、これは「所有する」ではなく、羊の世話の「責任を任されている、責任を負っている」の意味です。百匹の羊を持っている人は裕福な人です。そんな人は羊の番という卑しい仕事をせずに、雇った人々に羊の番をさせました。しかも、一人では番をさせなかったそうです。二、三人で番をさせました。そうすると、このたとえ話が語っているのは、百匹の羊を飼う金持ちではなく、仲間と一緒に実際に羊の番をしている貧しい人々です。

### 4 節：一匹を見失ったとしたら

「失う」を意味するアポツリューミの能動態の過去分詞形が使われています。これは見失った羊飼いの責任が問われる書き方です。「九十九匹を野原に残して」は、上に書いたように仲間と一緒に羊の世話をしているので可能となります。そうすると、一人の羊飼いが一匹の羊を見失ったことに気づき、責任を感じて探し始めたのです。

### 4 節：見つけ出すまで

「見失った一匹」は先ほどのアポツリューミが使われています。不思議なことにここでは現在完了形です。羊飼いは「羊が一匹いない」と能動態で気がつきます。そして責任を感じます。しかし、ここでは現在完了の形にして、「いなくなった」という意味が強調されています。「捜し回らないだろうか」はギリシア語でポレウオマイですが、これは遠くへ旅に出るという意味あいです。そうしますと、この羊飼いは一匹を探してあちこち移動したのです。その頃の習慣では見つけた羊が仮に死んでいても、死体を持ち帰ったそうです。それほど、羊のことを気にかけていたのです。

### 5 節：その羊を担いで

死んでいても持ち帰ったのは、もっと現実的な理由からです。それは羊飼いが羊を盗んで売ってしまったのではない証拠となるからです。ましてや羊が生きていたら、大喜びで羊を肩に担いで戻って行きます。羊は 30kg くらいでしょうか。かなりの労力です。それでも生きている羊を見つけた喜びは、その労力とは比べものにならないものだったでしょう。

## 6 節：一緒に喜んでください

見失った羊を見出し、羊も羊飼も無事に帰ってきたのは、周りの人も巻き込んだの大きな喜びの体験です。「友達」(フィロス)、「近所の人」(ゲイトン)も男性の複数形です。男性だけの喜びの集まりだったとも考えられますし、もしかしたら近所の人をすべてを男も女も子どもたちも呼び集めたのかもしれない。「呼び集めて」はシグカレオ、「一緒に喜んでください」はシグカイローとギリシア語でいいですが「一緒に」を表す接頭辞であるシンが使われる合成動詞です。このたとえば「そうだ、当然そうする」という答えを引き出すための修辭的な疑問文で始まります。大切なものを失くしたら見つけるまで探し出す。見つけたらみんなで一緒に喜ぶ。「当然そうしますよね! そうじゃありませんか?」という主張が隠されているたえではないでしょうか。

## なくした銀貨のたとえ:

### 8 節：ドラクメ銀貨を十枚

このたとえばも修辭的な疑問文で始まります。「一体、どんな女性が……しないだろうか」と呼びかけられて、聞き手、あるいは読み手は「当然そうする」と強い共感、強い同意を引き出す文章です。

ドラクメ銀貨はおよそ 3.5g の銀貨です。ローマの貨幣単位のデナリと同じです。1ドラクメは成人男性の一日分の賃金ですから、10枚とはけっこうな価値です。

なぜ10枚のドラクメ銀貨をこの女性が持っていたかは不明です。想像するしかありません。ある聖書学者は、このお金は女性の結婚の持参金であり、衣服に装飾品として縫いつけていたのだらうと解釈していますが、それは近代的な中東の習慣であり、しかもベリーダンスを意識しているとしてフェミニズムの観点から山口里子先生などは斥けています。

銀行のない時代ですから、家のお金の管理は女性に任されていたそうです。銀貨が一枚失われたら(ここでもアポツリューミが使われます)、その女性の責任です。自分でそれを弁償しなければならなかったそうです。そうなるを見つけ出すまで探すのは当然なことでしょう。女性は苦労して、探し続けたのです。

### 8 節：家を掃き

昼なお暗い庶民の家ではランプの油は必需品です。それは高価です。それを灯して、探し始めるのは、探し出そうとする決意の表れです。床を掃くためのホウキはナツメヤシの枝でできていたそうです。ナツメヤシは栄養価の高い実をつけるところから、いのちの木と考えられていました。古代メソポタミアでは、ナツメヤシは女神の象徴だったそうです。そんなナツメヤシの枝でできたホウキで掃くのは何か象徴的な意味を感じさせます。

## 9 節：一緒に喜んでください

ここでの「友達」はフィリアスですから、女性形です。前のたとえと対照的<sup>たいしやうてき</sup>になります。おそらく女性たちは、お互い<sup>たが</sup>に支えあ<sup>ささ</sup>うようなネットワークを持っていたのでしょ<sup>も</sup>う。ですから、見つけたら「呼び集めて」、<sup>よ</sup>「一緒に喜ぶ<sup>あつ</sup>」のは当然なことでした。ここでも前のたとえの動詞が繰り返<sup>く</sup>返<sup>かえ</sup>されています。

そして、前のたとえと同じように「当然そうしますよね！ そうじゃありませんか？」の主張<sup>しゅちやう</sup>が隠<sup>かく</sup>されているのです。

### 説教：「一緒に喜んでください」

現代社会は、一緒に喜ぶことがなかなかできなくなった社会です。ましてやこの3年間のコロナ禍<sup>か</sup>で、皆で一緒に喜ぶ機会<sup>きかい</sup>がずいぶんと減りました。そんなわたしたちの現実に今日の福音朗読では「一緒に喜んでください」と二度繰り返<sup>く</sup>返<sup>かえ</sup>されます。朗読では読みませんでした<sup>が</sup>、もう一つのたとえ（いわゆる『放蕩息子のたとえ』）の最後でもお父さんはつぶやきます。「だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴<sup>しゅくえん</sup>を開いて楽しむ喜ぶのは当たり前ではないか」（32 節）。ここでも、「一緒に喜ぶ」のは当たり前でしょ<sup>や</sup>と呼びかけられています。

教会は「一緒に喜ぶ」場所だと思います。ミサは「一緒に喜ぶ」という喜びの体験<sup>たいけん</sup>の場面です。祈りは「一緒に喜びながら」神さまを体験する時です。ミサの始まりと終わりで<sup>の</sup>信者さん同士のおしゃべりとかも「一緒に喜ぶ」貴重な体験<sup>きちやう</sup>です。そして、何よりも子どもたちが「一緒に喜びながら」ミサを楽しんでいます。ミサ中に楽しそうにする子どもたちの姿<sup>すがた</sup>を見て、大人はハッとさせられます。「喜んでいるのだろうか?」、「一緒に喜んでくれる人がそばにいるのに、その人をないがしろにしてないだろうか?」、「この子たちのように、喜んで生きてみたい」などなど。

今日の第一朗読は一緒に喜べない神さまが登場<sup>とうじやう</sup>します。もちろん金で子牛<sup>つく</sup>を造り、その前で喜び踊ったイスラエルの<sup>よろこ</sup>人々の喜び方は神さまが望むような喜び方<sup>のぞ</sup>ではありませんでした。それは確か<sup>たし</sup>です。それでもモーセは神さまに執り成<sup>と</sup>します。そして、神さまは思い直<sup>な</sup>しました。福音朗読では、「一緒に喜ぶ」神さまの姿<sup>お</sup>をわたしたちに思い起こさせるのではないでしょ<sup>や</sup>うか。

